



## いにしへの映画つれづれ① 伝説の外画ドラマ「アンタッチャブル」

千葉豹一郎

昨今、「アンタッチャブル」といえば、お笑いコンビや仲間由紀恵主演のドラマが有名で、ケヴィン・コスナー主演の映画版（87）もやや影が薄い。

しかし、「アンタッチャブル」という名を広く知らしめたのは同名のテレビドラマだった。ギャングが跋扈した禁酒法下の1920年代のローリング20に実在した、エリオット・ネス率いる特捜隊「アンタッチャブル」の活躍を描いて大センセーションを巻き起こした。トミーガンまで登場する毎回の壮絶な銃撃戦が話題となり、高視聴率をマークして一時代を画した。番組がスタートした1959年前後から、時ならぬ20年代の

ブームが起き、「鉛の弾をぶちかませ」(58)「機関銃ケリー」(59)「暗黒の帝王アル・カポネ」(59)「暗黒街の帝王レグス・ダイヤモンド」(60)「ギャングの肖像」(61)「機関銃を捨てろ」(61)など実在のギャングを主人公にした映画が次々制作され、テレビでも「ローレス・イヤーズ」「マンハッタン・スキャンダル（ローリング20）」が生まれた。これらの中で「アンタッチャブル」は抜群の人気と知名度を誇って代表格となり、その後のクرائمシリーズの流れも変え日本のドラマにも多大な影響を与えた。それまでも「ドラグネット」「ハイウェイ・パトロール」「シカゴ特捜隊M」「タイトロープ」らの人気シ

リーズはあったが、これらは30分番組で展開が早い反面、込み入った話を描くのには限界があった。しかし、前年の「サンセット77」あたりからワイド版と呼ばれた60分枠が徐々に主流となり、「アンタッチャブル」では長尺の利点を存分に活かして実録調のエピソードがじっくりと描かれた。

日本では「どてっ腹に穴をあける」(59)として劇場公開されたパイロット版は、エリオット・ネス自身が著わした原作通りアンタッチャブルを結成し、宿敵アル・カポネを逮捕するまでが描かれていた。パイロット版が放映されるや大きな反響を呼び、早速シリーズ化。数人のアンタッチャブルの



「テレビジョンエイジ」(1962年2月号)の表紙を飾った「アンタッチャブル」とクリント・イーストウッドの「ローハイド」の2大人気ドラマ。



映画版「アンタッチャブル」(87)の劇場パンフ。カポネ役はロバート・デ・ニーロ。

## 伝説の外画ドラマ「アンタッチャブル」

メンバー・キャストをほとんど入れ替えて、カポネの跡目争い以降を中心に、毎回完結でさまざまなエピソードが描かれた。本国で大人気の番組だけにTBSとNET（現テレ朝）を中心に壮烈な争奪戦が展開され、NETが放映権を獲得。主役のエリオット・ネス役のロバート・スタックは、戦前からの映画スターで主演作も多く、「風と共に散る」(56)ではアカデミー助演賞の候補になり、「東京暗黒街 竹の家」(55)と「最後の航海」(60)のロケのため来日もしている。ネス役は、「シェーン」(53)のヴァン・ヘフリンが健康問題で、戦時中に人気のあった次のヴァン・ジョンソンは夫人の反対で実現せず、第三の男であるスタックに回ってきた。最初は難色を示していたが、番組関係者に説得されて承諾した。「パパ大好き」のフレッド・マクマレーも候補だったといわれ、レーガン元大統領も後に「あの役は自分がやりたかった」と口惜しかった。ニコリともせず犯罪撲滅に

邁進するネス役は一世一代の当たり役となり、女性にも人気が高かった。ブラック・コメディの傑作「アパートの鍵貸します」(60)にも、今夜は「アンタッチャブル」があるから、と女性社員が誘いを断る場面があり人気の程を実感させた。

日本でも、日下武史の抑揚のないクールな吹き替えがピタリとハマって大評判となり、「あの声と目がいい！」という女性からのファンレターが、日下の所属する劇団四季やNETに殺到したという。日下は一気に知名度を上げて、その後も「アンタッチャブル」の日下さん、和製スタックなどと長くいわれ続け、スペインで客死した際も、死亡記事で「アンタッチャブル」について記されていた。血なまぐさい内容にもかかわらず、こうした女性ファンにも支持されて毎回30%以上の高視聴率を維持し、数ある外画ドラマの中でも特異な地位を築いた。NETは「ローハイド」「ララミー牧場」に「アンタッチャブル」

などのヒットシリーズを放映したことで外画ドラマの局というイメージが定着し、以後も多くの人気外画ドラマを世に送り出した。

「アンタッチャブル」を制作したデシル・プロダクションは、「ルーシー・ショー」で有名なシル・ボール夫妻が主宰し、多数のヒット作を生み出してきた。「アンタッチャブル」では当時のテレビ番組としては異例の制作費をかけ、全米から大量のクラシックカーを集め、ゲストも「駅馬車」(39)でアカデミー助演賞を得たトーマス・ミッチェルや同じく「キー・ラーゴ」(48)でアカデミー助演賞に輝いたクリア・トレヴァーをはじめ、リー・マーヴィン、テリー・サバラス、ピーター・フォークら有名スターを起用。内容的にも良く練られていて、大変おもしろくムラがなかった。一番の見どころは何といても毎回の壮絶な銃撃戦で、その迫力たるや今でも歴代のトップだと思っている。拳銃やマシンガンの効果音も、近年の実銃の発射音に近



「アンタッチャブル」の面々。左からエンリコ・ロシー(ニコラス・ジョージエイド)、リー・ホブスン(ポール・ピセルニ)、ウィリアム・ヤングフェロー(アベル・フェルナンデス)の隊員たちとネス隊長(R・スタック)。(「映画の友」臨時増刊1961年11月号より)



当時はこんな雑誌まで出ていて、西部劇ブームや「アンタッチャブル」などとリンクしていた。

# 伝説の外画ドラマ「アンタッチャブル」

いものよりよほど迫力があつた。

1930年△月×日～という実録調のナレーターでストーリーが展開され、密造酒の摘発からギャング同士の抗争、誘拐、麻薬、労働組合の乗っ取りまで、さまざまな事件が扱われた。フランク・ニティ、ダッチ・シュルツ、レグス・ダイヤモンド、ラッキー・ルシアーノ、マー・パーカーら実在の有名ギャングも続々登場してネスと死闘を繰り広げた。

ギャングが牛乳やアーティチョークの利権を狙うエピソードもあり、前者ではニューヨークまで出かけて行き、日常の生活物資にまで魔手を伸ばすところに空恐ろしさを覚えた。禁酒法は天下の悪法、愚法、ザル法で、アルコールの製造、販売、運搬は禁止なのに、何と飲酒自体は禁止されていなかった。法施行以前にストックしておいた酒は飲んで構わないという理屈だ。取り締まりも熱心ではなく、スピーク・イージーと呼ばれた多くのもぐり酒場が半ば公然と営業していた。密造酒で大儲けしたギャングが組織化されたのもこの時代といわれ、身に付いた悪銭に

よる警官や裁判官などの買収も横行した。結局、ギャングをばいこらせ混乱を招いただけで、巨大組織となったギャングがあらゆる分野に食い込む副産物まで生んでしまった。絶対に買収に応じない、触れられざる者たち“アンタッチャブル”の存在意義は、こうした時代背景があつた。鉄の意志をもってギャングと対峙するネス隊長は、本当にカッコよく法と正義の守り神にさえ思えたものだ。番組を通じて禁酒法のみならず当時の社会状況なども知ることができ、面白さという点では数ある外画ドラマの中でもピカ一だった。

しかし、エスカレートしていった暴力描写が問題視されるようになり、暴力番組追放運動が起きてやり玉に挙げられる事態にまで発展。さらに、イタリア人ばかり悪者にする、とイタリア系のフランク・シナトラに怒鳴り込まれ、不買運動も起きて制作方針の変更を余儀なくされた。その結果、銃撃戦も激減して伝染病の蔓延を阻止する話まであって、気の抜けたビールのようになってしまう。「刑事コロンボ」と同様にごくたまにネス

のセリフで触れられるだけで、けっして出てこなかったネスの妻を登場させる案まで検討されたという。しかし、世界中で大ヒットしてリピート回数も格段に多く、最も成功したシリーズといわれている。日本でもNET、フジ、12チャンネル、TVK、スーパーチャンネルと局を変えて何度もリピートされ、全話のビデオやDVDを今も大事に持っている。

もっとも、ほとんどは実際の事件と実在のギャングを結び付けたフィクションで、エンドロールでも表示している。アル・カポネ（ネヴィル・ブランド）や経済ギャングのフランク・ニティ（ブルース・ゴードン）らのキャラクターも実像以上に凶悪に描いて（映画版ではニティは殺し屋にされていた）、カポネの遺族から名誉棄損で提訴されたりもしている。しかし、実録調の効果もあって大衆の多くは真実と信じ込み、ネスは名だたるギャングたちを一掃した、ワイアット・アープらと並ぶアメリカの英雄伝説の一人にまで祭り上げられた。実際のネスも正義感が強



く、演じたスタックよりもむしろハンサムであった。ところが、その一方で自己顕示欲と出世欲が人一倍強い目立ちたがり屋で、ドラマとはまったく違う人物だった。身分も現在のATFの前身BA TFという財務省所属の酒類取締官で、日本ではFBIと訳され（原

「アンタッチャブル」のビデオパッケージ。日下武史とナレーターの黒沢良で新たに吹き替え直した。

# 伝説の外画ドラマ「アンタッチャブル」

語ではFederal Agent と言っていた)本国でもそう思い込んだ向きが多かった。ネス自身もFBI捜査官になることを切望していたが、カポネ逮捕を喧伝して自分より目立ったネスに嫉妬し毛嫌いもしていた悪名高いFBI長官 J・エドガーことエドガー・フーパーによって阻まれた。結局、アンタッチャブルの解散後は、シカゴやオハイオで酒類取締局の首席捜査官を務め、禁酒法の廃止後はクリーブランドの公安治安本部長に就任し、はびこっていたギャング退治に辣腕を振るった。しかし、「キングスベリー・ランの虐殺者」と呼ばれる大量猟奇殺人事件に悩まされ、犯行防止の名目で治安の悪いスラム街を焼き払いながら事件を解決できず非難にさらされた。その後、飲酒運転で当て逃げ事故を起こして辞職。ネスは酒類取締官でありながら生涯を通じてアルコール依存症で、キャリア高位の職まで酒で棒に振ったのはシャレにもならない。以後は民間警備会社の会長に就き、戦後の46年には3度目の結婚。翌年にクリーブランド市長選に立候補するも、多額の選挙資金を投じながら相手候補に大敗した。後に警備会社を解雇され、セールスマンなどをして生計を立て、借金を重ねながら酒場に入り浸ってはかつての武勇伝を吹聴する日々を送った。やがて、紙すき会社の仕事を得てからも変わることはなかった。1956年、仕事関係で知り合ったスポーツ記者で作家のオスカー・フレリーとの出逢いが思わぬ幸運をもたらす。ネスの与太話を信じて興味を持ったフレリーは本にすることを勧め、ネスの保管していた新聞の切り抜きや資料などをもとにフレリーが執筆し、「アンタッチャブル」と題し共著として出版した。「アンタッチャブル」はベストセラーとなり、すぐにテレビ化されて大センセーションを巻き起こした。これに触発されて、アンタッチャブルの隊員だったポール・ロブスキーの「最後のアンタッチャブル」、ジョン・H・ライル判事の「カポネを捕らえろ」などが出版され、フレリーもクリーブランド時代のネスを描いた「アンタッチャブル」の後日談「アンタッチャブルの活躍」を著わしている。ロブ

スキーはテレビの「アンタッチャブル」のアドバイザーも務めたが、ネスの地位などネスの著書とはかなりの相違が見られ、一番驚くのはアンタッチャブルの中にも買収された隊員がいたという記述である。前述のようにシリーズはほとんどフィクションだったが、原作も過度に話を膨らませていて、実際には銃撃戦など一度もなくアンタッチャブルの活動範囲もごく限られたものだったようだ。それどころか、密造酒の摘発を主な任務とするアンタッチャブルは、カポネを脱税で狙っていることを悟られないための目くらましだったという説もあるが、87年には映画化もされアンタッチャブルの活躍はさらに伝説化された。しかし、ネスは自著の校正を終えた直後に心臓麻痺で急死し、著書が書店に並ぶ光景やその後の大成功も目にはなかった…。もっとも、存命だったらしゃり出てきてボロが出たかもしれず、劇的な急死は本人のためにも不幸中の幸いだったのかもしれない。

ネスに扮したロバート・スタックはロサンゼルス市の旧家の生まれで、フランスで教育を受けたという正真正銘のお坊ちゃん。帰国当初は英語が話せず、実兄との会話もままならなかったという。父親が外交官だったことから、駐英大使も務めたジョセフ・ケネディの息子で後の大統領ジョンとも親友で、学生時代に共同でアパートを借りていたという(二人で何をやっていたか、想像がつこうというものだ)。学生時代はスポーツで鳴らし、特に射撃とスキーでは全米の記録更新者でもある。映画入りは、当時のアイドル、ディアナ・ダービンの相手役として「銀の靴」(39)でデビュー。スカウトされたということになっているが、トップスターのクラーク・ゲーブルとキャロル・ロンバード夫妻が家業の馬のレンタルの顧客だったというから、彼らの口利きだったと考えるのが自然だろう。実際、飛行機事故死したロンバードの遺作「生きるべきか死ぬべきか」(42)にも出ていることもそれを裏付ける。見栄えの良さからコンスタンスに出演を続け、初の立体映画「ブワナの悪魔」(52)など主演作も何本もあり、

前述のように「風と共に散る」(56)でアカデミー助演賞にノミネート。しかし、一生喰うに困らない大金持ちだったこともあってか、いまひとつ身が入らず決定打に欠けた。だが、ネスという当たり役に出逢い、エミー賞にも輝いて世界的名声を得るまでになった。シリーズ終了後は、得意のフランス語を生かして「パリは燃えているか」(66)や名優ジャン・ギャバン共演の「太陽のならず者」(67)などに出演した。数年間のヨーロッパ行きは、本物のギャングなどからの執拗な脅迫からの逃避行だったといわれる。帰国後は「特捜隊長エバース」や「ロス警察特捜隊」などのシリーズに主演するも、ネスのイメージが強過ぎてあまり成功しなかった。後年は「1941」(79)などのコメディ映画で活躍する一方、91年にはテレビ・ムービーの「アンタッチャブル・リターンズ」で久々に戦後のネスを演じた(こちらの内容はまったくのフィクション)。晩年、日本の週刊誌のインタビューで、ネスの属していたATFの部署では、今でもネスの誕生日にパーティーが開かれていることや、ネスのキャラクターは、親友で第二次大戦の英雄から俳優になったオーディ・マーフィや「七人の侍」(54)などを参考に作り上げた、と語っていたのが印象的だった。

\*\*\*\*\*

## 「アンタッチャブル」1959～63

モノクロ60分

The Untouchables : デシル・プロダクション

出演 : ロバート・スタック / ブルース・ゴードン / ネヴィル・ブランド

### 著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。